

「イスカリオテのユダ」

2014年06月14日

ユダは、弟子の一人に選ばれながら、主イエスを裏切り、エルサレム神殿当局に引き渡した人です。人間の謎めいた心の闇を表した人でしょう。ユダは、なぜ師を裏切ったのか。その理由を知りたいと、誰もが思います。私は、聖書の記述から、三つのことが考えられると思っています。

第一は金銭目的であったという理由です。神殿当局に銀貨 30 枚で引き渡すと約束し、受け取っています。銀貨 30 枚は、馬一頭の値段とされています。銀貨はおそらくデナリオンでしょう。1 デナリオンは1日の生活費ですから、30 枚は一ヶ月分の生活費に当たります。確かにヨハネ福音書には、ユダは主イエスの伝道隊の会計係で中身をごまかす金銭に汚い人であったと記しています。しかし、ユダほどの才覚のある人が、1ヶ月分の生活費を理由に、師を裏切ったとは思えない節があります。

二つ目は、愛憎の葛藤です。ユダは主イエスを愛し、愛に満ちた言葉と業に強く惹かれていました。しかし、その愛には憎しみが内に潜んでいました。愛するゆえに憎しみが燃えることはあり得るでしょう。太宰治は『駆け込み訴え』の中で、その愛憎の葛藤を描き出しています。他の弟子たちがガリラヤ出身であったのに対し、ユダだけがユダ出身で、他の弟子たちと距離があり、それが愛憎を増幅させたとも考えられます。

第三の理由は、ユダが求めたキリストと主イエスが示したキリストの間に大きなギャップを見たということです。ユダは、主イエスにローマ帝国からの独立、解放をもたらしてくれるキリストを求めていた。ところが、エルサレムに向かってからの主イエスは、政治的解放者ではなく、死にゆく道を歩んでいる。神殿当局の動きを察知したユダは、主イエスの死は避けられない。そうならば、売り渡し、わが身の安全を図った方が得策であると思った。この三つの理由が考えられます。

もう一つは、聖書の記述からではないのですが、ユダは主イエスを最も深く理解し、主イエスの指示を受けて、十字架の死へと売り渡したと、言う人がいます。いずれにしても、裏切った理由を定かに知ることはできません。

ユダは師を引き渡す時、愛のしるしである「接吻」を合図にしています。普通の神経から逸脱しています。しかし、主イエスに十字架による死刑が決定された時、良心が咎め「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と言っています。受けとってもらえない銀貨 30 枚を神殿に投げ込み、首をつって死にました。使徒言行録は更に「体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました」と悲惨な死を伝えています。これは、師を裏切ったユダに対する、初代教会の憎しみを表したものでしょう。ユダは屈折した人でしたが、良心の呵責に耐えられず、自死しました。そこには、まともな面もあったことを示しています。ユダの心の中には、深い闇があった。その闇に引き寄せられて、裏切る行為へと進んでいったのではないか。そして人は皆、心に闇を持っています。ですから、ユダに自分と重ね合わせて見るのです。

このユダは、主イエスの赦し、救いに与っているかという議論があります。ユダに対する非難は大きく、ヒトラーなどはユダの末裔としてのユダヤ人を絶滅しようとしたくらいです。しかし私は、ユダも主イエスの十字架の赦しの中に招かれていると信じています。ユダが排斥されたら、ユダと同じ私たちも救いに与ることはできないでしょう。